



TITLE:

京都大学図書館外部評価報告について

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学図書館外部評価報告について. 静脩 2000, 37(1): 12-13

ISSUE DATE:

2000-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37577>

RIGHT:

京都大学図書館外部評価報告について

附属図書館創立百周年を記念して行われた、京都大学図書館の自己評価、外部評価の報告書が3月に完成しました。

報告書は、第1部：大阪市立大学学術情報総合センター所長石原武政教授、東北福祉大学附属図書館長及川三千男教授、京都府立図書館長小山雄一氏、立命館大学総合情報センター郷端清人次長、三重大学附属図書館長柴田正美教授、図書館情報大学永田治樹教授による外部評価、第2部：附属図書館をはじめ各部局、研究所の図書館・室の現状と課題、第3部：利用者アンケートの報告、そして、資料編となっています。タイトルにあるように、京都大学図書館の現状と将来への展望を示す²⁴⁷頁の膨大な報告書であり、今後の京都大学図書館にとって、示唆に富んだ内容となっています。この評価を受けて、職員間でも、「利用者アンケート、自己評価（現状と課題）、外部評価で改革に向かう機運ができつつあるのではないか。各評価委員の6つのレポートは改革の焦点を定めるのに非常に有力である。」などの意見がだされています。

評価内容（要旨）

1. 先進性について

(1) 京都大学電子図書館システム。業務のコンピュータ化。(2) 土曜、日曜開館。(3) 全学共通科目「情報探索入門」(4) ホームページによる広報活動。(5) 商議会メンバーによる書店での選書（学生の希望を先取りする意味で意義深い）。

2. 「調整された分散方式」について

(1) 分散主義は一概に否定すべき事ではないだろう。歴史、規模を考えると、一つのあり方として評価するが、内実を伴っていない。(2) 調整のための、全学的な意思決定を行う機関が明確にされていない。(3) 中・小規模の図書室が連携なしに個々に運営されている状況。

3. 機能分担について

(1) 附属図書館は学習支援。部局図書館・室は研究支援。

4. 管理について

(1) 図書館経費確保の努力を。(2) 図書収集方針の明確化。学生用図書選定基準の作成。(3) 予算の一定割合を司書が選定する制度を。(4) 京大内資源共有と分担収集。(5) 電子的資料の将来性は高いが、旧来の資料の必要性にも気を配る必要がある。(6) 選書・発注・受入・予算管理・目録・装備・製本の徹底した合理化・効率化を。(7) 管理、運営の効率化は京都大学図書館システムの利用者へのサービス充実という方向を見失ってはならない。(8) 単純に一元化・統合化を目指すのではなく、一元化・統合化でどれだけのサービスが向上できるかについての合意を得る必要がある。(9) 図書館活動の広報が重要。(10) 遡及入力促進。(11) 新たな時代に対応した情報の選書・収集・蓄積・発信、電子図書館システムの開発・維持・管理。(12) 新たな図書館機能に対応できる人材の育成。

5. サービスについて

(1) 共同利用体制の確立。教官層への理解を求める努力(2) デリバリーシステムの整備。(3) ユーザーの声を聞くシステム。『静脩』の活用。(4) 全学共通の利用証を。(5) ショート・ローン。(6) 利用頻度の高い資料の複本購入。(7) デジタル情報を駆使した学術サービスやレファレンスを。(8) 附属図書館と部局図書館・室のサービスには相当の温度差が存在。専門図書館（部局）の機能を担うに足る知識・経験を蓄積できるだけの環境が整備されていない。担当職員の定着性の確保。(9) 職員の能力不足に対する人事異動による不慣れ。

6. 運営について

(1) 全学図書館システムのあり方を検討する機

関の設置。(2) 調整機関の設置。(3) 部局図書室の機能分担と連携・調整を実現するための組織の一元化。(4) 機能別に大胆な図書館の再編成を。思い切った組織改革を。(5) 部分的な統合・合併にむけて検討を。(6) 部局図書室の管理運営について附属図書館の基本方針の表明を。(7) 附属図書館と部局図書室を一体にした図書系組織の発足。(8) 小規模図書室の統合(専門分野、立地条件の近接ごとに)。(9) 外部

資金の導入。(10) 業務の一部のアウトソーシング。

7. 施設について

(1) デポジット・ライブラリーの設置。(2) 逐次刊行物集中管理センター。

(3) 書誌作成業務の集中処理センター。

8. その他

(1) 地域における図書館界の連携。

附属図書館資料紹介

沢山の寄贈図書が書架に並びます - 片田文庫について -

平成11年9月6日、再生医科学研究所の永田和宏教授から、附属図書館の熊谷事務部長に「故片田 清氏の蔵書を寄贈したい」との電話があり、同時に膨大な量の蔵書目録が送られてきました。

我々は、附属図書館の書庫はすでに満杯に近く、まとまった形で寄贈を受けるのは困難という考えを持っていましたが、約1万4千冊の蔵書目録や、直接故片田氏宅に伺い蔵書を見せて頂いた瞬間「上品な書店」という感じがし、蔵書内容から「絶対京都大学の宝になる」と判断しました。その後、附属図書館で検討した結果、寄贈を受ける。将来は分散配架するにしても、当面は「片田文庫」として一括して開架書架に置き、多くの利用者の皆さんに読んで頂こうと判断いたしました。

その蔵書はすべて全集物で、多くのジャンル(宗教関係の図書は無い)を網羅し、現在手に入れようとしても不可能なものがありますし、古書として高価で販売されているものも沢山あり、初版本が多く見られました。現在も継続して出版されている新しい全集もあります。

寄贈の際、何回も広島から駆けつけ大変な尽力をくださった、従兄弟の片田欣也氏によると、片田 清氏が亡くなったのを知った書店

が、段ボール箱に入った全集を数箱、慌てて配達にきた。その全集物もすでに代金は支払っていた。というエピソードもあります。

現代日本文学全集 増補決定版 143冊。吉川英治全集 114冊。など文学関係のほか、政治、思想から芸術、長谷川町子全集まであります。

故片田 清氏は、昭和28年に本学文学部仏文をご卒業され、その後、京都、大阪の高校で教鞭をとられ、平成10年12月31日に急逝されました。身寄りの方が無かったために、教え子である永田教授が、前々から片田氏が愛着を持っていた京都大学への寄贈を斡旋してくださったものです。

附属図書館で、通常1年間に購入する図書数を遙かに超える寄贈を受けたことになり、大変な作業量に達しますが、故人や、寄贈にかかわってくださった方々のご意向を一刻も早く利用者の方々に伝えるべく整理作業を行っています。

これらの蔵書が附属図書館2階の書架に並べられると、雰囲気が一変すると思います。

夏頃には皆様の目に触れるべく努力していますので是非来館されご利用頂きたいと思います。なお、この蔵書の寄贈にご援助頂いた、故片田清氏の従兄弟にあたる片田欣也氏、永田和宏教授、相続財産管理人の山下勝生氏に心より感謝いたします。